



石井明道志

本六

~ 13
3363
13



13
3363
13

三十

石井 義榮

石井明道志卷の武居

石井明道志卷の武居

目錄

一 原部里見氏墓の事
美濃縣白土を改め事

大正十年八月廿九日
本大學出版部 贈

石井明道志卷の武拾八

源氏部 生見氏 吉六の事

系志 堀白 源と改むる事

元父の姓を討し 為我の形の事
— 是の事 是の事 是の事
あ 是の事 是の事 是の事

改めよん天泉道の家海に民所を
うよと海し所守の死に改めよ
先皇標を松尾友の豊後と
蘇あくくよと名を改め
と此致とふ越しし川雲道
長改め十年以来忠孝の
磨く事代々新く侍奉の
由命あり苦く事毎も徳を

と改めよん天泉道の家海に民所を
うよと海し所守の死に改めよ
先皇標を松尾友の豊後と
蘇あくくよと名を改め
と此致とふ越しし川雲道
長改め十年以来忠孝の
磨く事代々新く侍奉の
由命あり苦く事毎も徳を

毛の申 平の是と書しに減ふ
志 桐遠ありて己が飛ぶ
笑と情を 軒あをら家人と
何れもむ事い代よ異あり
そ能く平の武令年の書きあふ
け 千毛の書の巻の外食を以
家身くし 思ふは食事致す後
州あり 奥言は新理し

食事致すを以てかば中解
くそまの 軒ありて中い言あふ
とふまの 人の衣類をふす
づつと軒ありて靴の
と付ふ若葉とらふも冬衣類
こつと物ありて中い言あふ
小毛の信を 袴あふらん
まの 市衣ありて十人あ

をんあそ果身よそそそ 豊くは
何心まき若くそそ 後年事
くしとまきまのぞ ぞ中よま
その一ツ若くそそ 後さくま
堪忍波 若く 若く 若く
そのあそ 允体名小若の 欠着の
多くい 若く 一若く 事の 合くま 若
あそまき 調とのん 若く 若く

くくく 若く 若く 若く
侍業とまき 若く 若く 若く
おのあが 飛と若く 若く 若く
若く 若く 若く 若く 若く 若く
根えん 若く 若く 若く 若く 若く
若く 若く 若く 若く 若く 若く
若く 若く 若く 若く 若く 若く
若く 若く 若く 若く 若く 若く
若く 若く 若く 若く 若く 若く

新くそんを加へて改め
兼くしりしり光りなる
ふきしひし海なりし
かきんしんの中事し戸際まで
明くそんをひきひの物とす
早き志しん心
まのあ板倉及の仕立有縁
事あり根えしと雲霞の木

死後とす惜しむるもの
美子の三つと数系橋の三つ
花をたす致ししと若くは
水かきか拾遺の名流り
里々木たかの音とあはら
紙んつはらつ精氣のまじり
習ひし心と志の味と
母上の役目祀文同話書宗志

新とゆは是にえあぬ世象
と至とすつと顔と顔とひふ
えと
千太郎が兄あふばか
ちん
桐野あしは作のあくまの物
生田長山あふ海
らあふまの系作ふ明あふ道ふ

新新あまきつて
千太郎のたふし
桐野あしは作のあくまの物
生田長山あふ海
らあふまの系作ふ明あふ道ふ

遠くを思ひしは家が大幸の
堪忍千太郎と堪忍と
舟の心と押去つら木かめ
空しく自高と肩先は又寸
指く去つと孫りかき
月高遠くつらるるしや
畏しとちと居る水
去りつらるるしや

り地とつらるるしや
ゆゑとつらるるしや
遠くは白眼の中大様と
舟と水と舟は木を知らず
舟と舟と舟は木を知らず
舟の舟と舟は木を知らず
舟の舟と舟は木を知らず
舟の舟と舟は木を知らず
舟の舟と舟は木を知らず

あつち我無くえん本は書けり
早稲 桐葉 あり 會加ふ 叶ひ
まゝ 吉州 家へ 一也 越え 大事
まゝ 一 親の名を 何げ
吉錦 へ 針を 包むる 吉錦が
美忍の 松さ 故し 白雲 一音
あゝ あり 一 水 傍草 何れ
あゝ あり 一 月 一 何れ 一 見え

對白 小千太郎 が 見ゆ 一 見 取
中 代 あり 一 一 見 あり 一 見
まゝ あり 一 一 見 あり 一 見
名 利 一 一 見 あり 一 見
百 八 節 一 一 見 あり 一 見
まゝ あり 一 一 見 あり 一 見
古 年 一 一 見 あり 一 見
まゝ あり 一 一 見 あり 一 見

かふ水くわが住まへと乃家分この
仕人をもあへ

石井明道志卷の武格人

石井明道志卷の武格七

目錄

一 神物人との雑貨の事
茶石井と古連龜山と巻の支

石井明道志卷の武拾七

神和部人との雑談の事

美下部と才連鬼山の巻の巻

大蔵典典六十七部の抄略
の程を留小留の巻の巻
秋の生因重列一加倉名今りの太田



解津さ成は 安あく是ふ
居れり 三年以常ふ
見平と 江戸は 江戸
親む 法の 月村を 力小 笑一ツ
要列 ちを 柳倉 源
家 ぶ ちを 翠子 河小 海
岸 かく 白川 之 表 二 古 福 富
岩城 平 今 津 岸 沢 川 近

昭次かの七しちヶ所 堀新しんと 柳倉やうくらと
身みと 水戸みづうの 源げんと 翌年よくねん三月迄
くろの 解げ 及び 平へいと 丸列まるりつ 把後へいごの
解げ 及び 平へいと 丸列まるりつ 把後へいごの
た田たと 念ねん 然ぜんと 柳やなぎと 後田ご
みちの 柳やなぎと 名なと 元平げんぺい 安東あんとう
の 者ものと 家けと 屋やと 堀ほりと ちを 把後へいご
身みと 柳やなぎと 堀ほりと 十七年

恒長をそ我
是と願ふ是と一通と
山歌の城下
とらふ神和是と
状の上書の中
後日ある事
是所因と死
吉田尔中

のもののふ
事あり
あふ魚
物名
業を長也
あふ魚
あは格
原

吾事^{わがこと}の^{こと}所^{ところ}の^{こと}と^{こと}なり
是^{こゝ}の^{こと}川^{がは}の^{こと}の^{こと}宗^{そう}社^{しゃ}と^{こと}なり
所^{ところ}の^{こと}の^{こと}の^{こと}の^{こと}の^{こと}の^{こと}
浪^{なみ}人^{ひと}の^{こと}の^{こと}の^{こと}の^{こと}の^{こと}
浪^{なみ}人^{ひと}の^{こと}の^{こと}の^{こと}の^{こと}の^{こと}
波^{なみ}の^{こと}の^{こと}の^{こと}の^{こと}の^{こと}
師^しの^{こと}の^{こと}の^{こと}の^{こと}の^{こと}
連^つ年^{ねん}の^{こと}の^{こと}の^{こと}の^{こと}の^{こと}

麻^あ留^{りゅう}の^{こと}の^{こと}の^{こと}の^{こと}の^{こと}
波^{なみ}の^{こと}の^{こと}の^{こと}の^{こと}の^{こと}
以^も波^{なみ}の^{こと}の^{こと}の^{こと}の^{こと}の^{こと}
と^{こと}の^{こと}の^{こと}の^{こと}の^{こと}の^{こと}
と^{こと}の^{こと}の^{こと}の^{こと}の^{こと}の^{こと}
後^{のち}の^{こと}の^{こと}の^{こと}の^{こと}の^{こと}
君^{きみ}の^{こと}の^{こと}の^{こと}の^{こと}の^{こと}
り^{こと}の^{こと}の^{こと}の^{こと}の^{こと}の^{こと}

おいら九列う三人の道田水書
身まきくそんやーとわが家社の
何十文まよ小押あくわらこん
素一歩の叶を長一ありも
体長まゆーとまを断るは書ふ
酒買機保あく二の道田もる
之の目ふ山石の女房まくと汲あ
老の書はたごごーとくまはとま

そんがの筆まこのはの筆大の目
申あまのあまのあまのあま
まままの籠の目ままま
似くまやーとままま
初はつのままの神かみ大長おほなはの
何なにまままのままま
富士ふじのままのまま
新あらたままのままのまま

るす
と
ま
く
と
は
り
い
ま
ふ
書
水
身
と
を
通
ひ
流
あ
が
結
よ
し
ら
ふ
果
昨
小
叶
と
あ
は
れ
印
は
し
の
通
り
流
が
あ
ら
ぬ
自
り
を
く
は
り
運
回
せ
ぬ
も
戻
ら
ぬ
が
六
十
六
節
の
永
運
留
保
審
り
を
新
の
旅
ま
や
後
く
史
と
は
肥
後
一
國
と
を
と
り
又
徳
由
ふ

戻
り
を
か
り
あ
ら
ぬ
は
り
新
の
旅
ま
や
後
く
史
と
は
肥
後
一
國
と
を
と
り
又
徳
由
ふ
結
あ
ら
ぬ
一
早
後
り
く
と
留
に
ね
び
り
を
一
知
水
の
身
の
新
の
旅
ま
や
後
く
史
と
は
肥
後
一
國
と
を
と
り
又
徳
由
ふ
あ
ら
ぬ
一
早
後
り
く
と
留
に
ね
び
り
を
一
知
水
の
身
の
新
の
旅
ま
や
後
く
史
と
は
肥
後
一
國
と
を
と
り
又
徳
由
ふ

百の難をり救済し聖別し
三下八拾里の宗の初禮りある
宗吉の聖業をりし忠度の誠も
あきしし御神ありん救済され
初め如く苦とあはし事下と
性根も礼あり神をありし白と
去るしりむ小國ありしと
水(事)ありしあまの三人ありし

くしりふ交田ありしと名実の
りし物に款のありしあまの叶
まにありしと給ふりし事
聖別しありしと居りし事
りしに加へしと事ありし事
聖別し性還の別道ありし事
りしにありしと事ありし事
りしにありしと事ありし事

りて一時間ありて一里のありき
花去方まじく候に有る事ありし
其の八月下旬小瀬のあたりに
海とわたりてありし陸地
ありし頃には百里余の小園を
さし十月中旬小瀬城迄来た
尋ねぬふまに中花去の病死を
知る所あり是れなり是れなり

今一宿相倉の月夜ひん丈と
いふ戸へ登りて山見の女と笑
ふのこころありてうらぎに逢
ふに里にありの御合とて山神人
なりとてこころありて小瀬も
衣袋も割りて小瀬もさし
懐鏡も手拍あそび小瀬ふか
きとて一柳もきとおもひ

今らん百一十は行死をいふ
婦し若くは若のあしと初は
止むが百十あそとあそ又の
叔見の歌歌々々結ゆか結ゆか
しも百人の大歌や結ゆか結ゆか
あはぬしは神曲かかか
忠義をさすかかかかかか
まが忠貞かかかかかか

又見の歌あそ初んとしは
二ツ結あしは若かや百十
若し一ツあそいふと初は
婦し若くは若のあしと初は
あそいふ神曲かかかかかか
死ゆしは若かあそいふと初は
三つあそいふ若かあそいふと初は
夫の歌あそいふ若かあそいふと初は

水^{みづ}の^{うへ}の^{うへ}一^{いつ}太^{たい}の^{うへ}根^ねの^{うへ}種^ねひ^ひあを
お^おつ^つま^まが^が名^なの^{うへ}も^も又^{また}見^みの^{うへ}款^{くわん}と^とせう
命^{いのち}と^と惜^{おぼ}し^しむ^む事^{こと}あ^あら^らし^しむ^む事^{こと}
汝^{なんぢ}未^{なほ}が^が是^{こゝ}に^にま^まし^しひ^ひ卯^う辰^{しん}の^{うへ}事^{こと}
今^{いま}も^もし^しが^が款^{くわん}の^{うへ}故^{ゆゑ}に^にあ^あら^らし^しむ^む
此^{こゝ}の^{うへ}故^{ゆゑ}に^にあ^あら^らし^しむ^む事^{こと}
又^{また}ま^ま金^{かね}六^む次^じ人^{ひと}が^が又^{また}は^は仗^{じやう}我^{われ}系^{けい}
是^{こゝ}の^{うへ}死^しを^を致^{いた}さ^さる^る事^{こと}は^は是^{こゝ}に^にあ^あら^らし^しむ^む

超^{こゝろ}と^と討^うち^ちを^をあ^あら^らし^しむ^む事^{こと}
一^{いつ}も^もし^しが^が七^{しち}十^{じゅう}の^{うへ}光^{あかり}の^{うへ}事^{こと}
し^しん^んの^{うへ}故^{ゆゑ}に^にあ^あら^らし^しむ^む事^{こと}
未^{なほ}も^もし^しが^が事^{こと}の^{うへ}故^{ゆゑ}に^にあ^あら^らし^しむ^む
と^とし^しが^が事^{こと}の^{うへ}故^{ゆゑ}に^にあ^あら^らし^しむ^む
一^{いつ}所^{ところ}も^もし^しが^が事^{こと}の^{うへ}故^{ゆゑ}に^にあ^あら^らし^しむ^む
あ^あら^らし^しむ^む事^{こと}の^{うへ}故^{ゆゑ}に^にあ^あら^らし^しむ^む

あまのそとに死んていふと死の
二つ種物屋のしあひの
顔はえんていふと大いなる
陽をうけんとしつとていふ
中魚 是れ死んていふと
水船よいかよふとていふ
しあひのしあひのしあひの
是れ死の事とていふと
是れ死の事とていふと

あまのそとに死んていふと死の
都村の時中よふとていふと
川はうらやまのしあひの
とていふと死の事とていふと
まのしあひのしあひの
年がけに死んていふと
河はえんていふと
結東のしあひの

いふあを所と龜山稲原の山
朝美黄の山と書かふ
一通あを今さら三月
之の概席白席のあのと園の
中殿よふそとを秋の首と
との去り天一天と書かふ
天下ふりし
祥の井戸堀釜塚を以て

らじまを女らと事なり書ひ
あふふらわたりと書かふ
下ゆしか細のあつたひ
袖のあはの横ゆほ吉平横
肩よしはるる

石井明道志卷の式論

